

# 雑 感

短期大学部 講師 大窪久代



小倉遊亀 画集 11 磨針峠 1947年(昭22)

フルーツパフェ事件(?)がある。それは年長者の方を囲んで20数名くらいであったと思うが、二次会を兼ねて喫茶店に入った時のことである。注文は、こぶ茶1名、コーヒーが1名、その他の者はすべてフルーツパフェであった。フルーツパフェに集中したのは、年長者の方がフルーツパフェを注文したからである。この時のメンバーは私を除いてすべて男性であった。いくつものテーブルを占領して背広を着た男性たちが並んでフルーツパフェに対してはまさに“偉観”であっ

た。二次会の注文までも上に倣えをする或いはしなければならぬ不文律が、そこには、私の“まわり”には存在していた。

あれはひょっとしていわゆる、あくまでもいわゆるであるが「男の論理」というものだったのかしらと、後になって考えた。私より上の世代の女性たちは、この「男の論理」に真っ向から立ち向かって道を切り開いてくれたので、お陰で私たちの世代は先輩の女性たち程の苦勞をせず済んでいる、……ようである。確かにそのようであるが……。困み



に、フルーツパフェ事件における私は当事者ではなく、あくまでも、第三者であった。

女と男……どちらが主でどちらが従か、どちらが優でどちらが劣か、若さは女・男の価値を決める場合の重要な基準となり得るのか……愚問である。愚問である筈なのに、この愚問に私たちは無意識のうちに無意識の答えを出してその答えに囚われているように思われる。例えば、自己の優位性を男性であるということのみにおいている人がいる。また、一方、女の「敵」は男である……というもの、ある意味で囚われている。

札幌タクシー事件(?)がある。札幌のあるタクシーの運転手さんがバアバア、オバン、オナゴの定義をしてくれた。降りてから同乗者の女性が「運転手さんに抗議をすべきであった。」と、笑いながら彼の定義に耳を傾けていた私を暗に批判した。すると、もう一人の同乗者であった女性が言った。「彼の考えを変えるには北海道を一緒に一周したって無理じゃない？」あとでこの事を別の女性に私がまた笑いながら話をすると、「女がそういうことを許しているからダメなのよッ。」と、きついお叱りを受けてしまった。確かに運転手さんの定義には首肯できない、男性から見た男性に都合の良い女性の定義であったのだから。しかし、「運転手さん、それおかし

いですよ。なぜなら……」というようなことを、タクシーの中でしかもほんの数分前に初めて顔をあわせた人に話をする程、私は、おそらく“誠実”では・な・いと思う。

私の担当している秘書コースは受講生が女性・男性半々で、時折女性・男性についての話し合いを持つが、ある日女性が働き続けることについてどう思うか訊ねた。大多数の学生は女性も働き続けるべきであるという。しかし一人の男子学生は絶対に自分の奥さんは働かせないと主張した。後で彼のレポートを読むと、彼の母親は仕事から帰ると疲れたと言っては家事もしないで寝てしまう、父親が少しは家の中のこともやれと言うと、私だって働いているのよと言いつつ、やはり女は家において家事に専念すべきである、働く女性とは絶対に僕は結婚しない、と従来からの性別役割分担を主張していた。

人間にとって初めてこの世で接する同性異性は、母親であり父親であり、彼女らがどのような生き方をしているか、換言すればどのような女と男の付き合い方をしているか、それが子供に与える影響は大きいのだ、ということは今更ながら痛感すると同時に、人間の意識を変えることは、タクシーの運転手さんの場合ではないが、一朝一夕には成し得ない、どのくらいの時間を掛ければいいのかと考える。考慮してしまふ。

ただ私は、……でなければいけないということではなく、……という選択肢もあるが、……という選択肢もある、自分はこの選択肢を選んだが他はほかの選択肢を選んだ、そういう場合、その事実は尊重されてもいいのではないか、つまり他者の選択を一旦は自分の中に受け容れるという姿勢は大切なことで、自己の選択だけが唯一ではないという事実をもっと認める努力をしたほうがいいのではないかと思っている。「もしわれわれがもはやイデオロギーや政治的なカリスマに象徴される単一的な大きなモラルに頼るのではなく、む

しろひとりひとりの人間が自分の特異性に  
じてみずからの小さなモラルを確立しなけれ  
ばならない時代に入りつつあるのだとすれ  
ば、……まさにモラルとは自由の確立ではな  
く、他者の認識であり、他者の忍耐である…  
…それは、無数の異なったモラルの共存とい  
う不思議な時代への先駆けなのである。」(小  
林康夫・日本経済新聞平成4年2月8日朝  
刊) という指摘は妥当である。

個の確立は他の確立であり、他の確立なし  
に個の確立はない、しかしながら、人間は他  
を認めるということに、特に男性が女性を認  
めるということに激しい苦痛を感じるよう  
である。

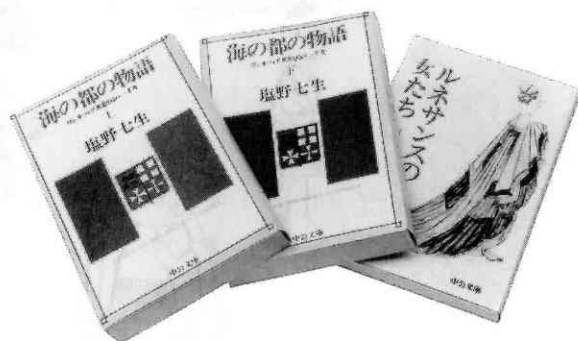
先程の男子学生には、母親である女性の、  
私だって働いているのよ、という叫びは何を  
意味しているのか、息子である男性・彼は考  
えて欲しいと思うし、それを考えるための材  
料をどれくらい提示することができるか、教  
員であり女性である私の責任ではないかと、  
彼のレポートを読みながら考えた。

さて、フルーツパフェ事件を述べる際男の  
論理という言葉を使ったが、論理に男とか女  
とか性的区別があるのだろうか。また、男は  
論理的であるが女は論理的ではない、なぜな  
ら女は子宮でものを考えるからである、とい  
うことがかつて言われた、現に今も言われて  
いるかもしれないが。私は論理に性的区別は  
ないと思うが、ただ女は子宮でものを考え  
ると言った人は“素晴らしい”と思う。この女  
性子宮思考説に対して、女性を侮辱するもの  
であるという批判がなされるがそれは間違い  
である。子宮でどうやって考えるのか、まさ  
に至難のわざというべきであるのに、女には  
それができると言う、女は子宮でものを考  
えるということは女性蔑視ではなく女性対す  
る過大“評価”であると理解した方がむしろ  
いいのではないかとすら思う。

また、「今日彼女は機嫌が悪いよ」あるいは  
「また彼女がヒスをおこすから」など、とか  
く女性は感情的であると言われる。確かにそ

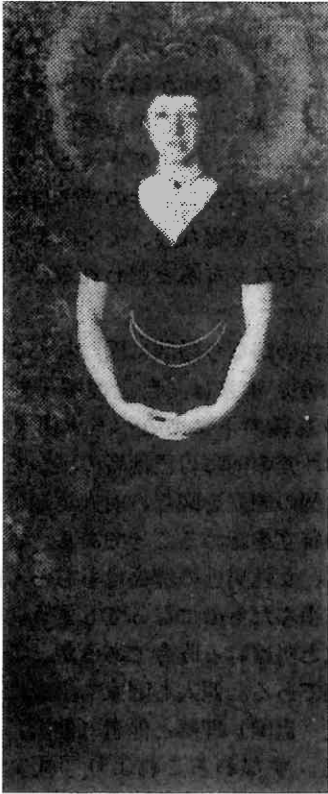
のような見方をされても致し方ないかなと思  
われるところもあるが、しかし私の短い男性  
観察歴(20年+ $\alpha$ 年)に基づいて考えるなら  
ば、男性もかなり感情的である。否むしろ男  
性の感情的は女性のそれに比して、ふ・か・  
い持続性を有していることが多い。つまり、  
感情的ということにおいては女性も男性もな  
くただ具現法に差異があるだけである、男性  
は感情の具現においてかなりトレーニングさ  
れている、と思う。女性が職場で活躍する期  
間が長くなり、女性と男性の共存がうまく図  
られるようになれば、女男の平等という“擬  
制”が喪失するならば、女性の感情具現もお  
そらく変わらざるを得ない、従来のような方  
法では対応できなくなると思われる。

女性と男性のかなり愚問に囚われたことを  
述べてきたが、本来は「自己理解・対人認  
知」という意識の下にあるべきと考えてい  
る。女男の性差の前に自己他者の別がある、  
自己理解は個の確立を図り、対人認知は他者  
認知・他の確立を認めることである。まずこ  
こで躓くと、女性男性の関係はもちろん同性  
間の関係も歪んだものになってしまう。国際  
化、国際化と叫ばれる昨今であるが、これに  
しても同様である。個人も国家も根底にある  
のは、「自己(自国)理解と他者(他国)の認  
知」である。すなわちこれより「礼」は生  
ずる。

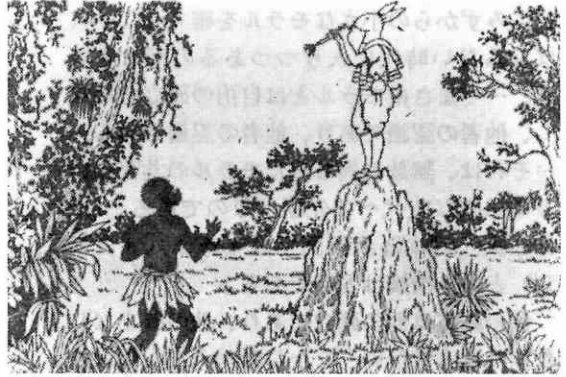


しかし、小倉遊亀ほどに人間修養に励むで

もなく、塩野七生のような史観もなく、I・S・ガードナーほどの財も行動力もなく、ただただ小さき人間の私はseinとsollenの狭間で悩み、原始社会の変革の際に重要な役割を果たしたといわれるトリックスター（道化の神）の出現を待つのみ、である。



一九〇×八一・二枚、ポストンⅡ I・S・ガードナー（油彩・カンバス、美術館蔵）



トリックスターとしての野兎：道化の民俗学(山口昌男)

風は己れの音を聴き雪己れの色を視る  
 いづれ非情の顔つきのまま  
 おのれより絶えずおのれを放逐し變貌し  
 否定しかつ敗北す

齊藤史「うたのゆくへ」より  
 塩野七生「チェーザレ・ボルジアあるいは  
 優雅なる冷酷」新潮社  
 「コンスタンティノーブルの陥落」  
 新潮社  
 山口昌男「道化的世界」筑摩書房  
 「道化の民俗学」新潮社  
 (秘書学・私法学専攻)



トリックスター神「エシュ」の像 (Frobenius)：道化の民俗学 (山口昌男)